

「学芸の森」とはなんだろうか？

木俣 美樹男
(東京学芸大学環境教育研究センター)

What is “Gakugeinomori” forest?

Mikio KIMATA
Field Studies Institute for Environmental Education

東京学芸大学のキャンパスを「学芸の森」と呼び、学芸の森プロジェクトが活動を始めてから、学芸の森環境機構、芸術館学芸の森ホール、学芸の森保育園などのように「学芸の森」が冠せられるようになった。

このように東京学芸大学を象徴し、個性づけるようになってきた「学芸の森」とは何だろう。キャンパスの自然的な環境を称した概念か

ら、次第に文化的な事物・事象を含みこむようになってきているようだ。

多くの大木が豊かに茂っている学芸の森はキャンパスを涼やかにしているばかりではなく、生物多様性が豊かで、絶滅危惧種に加えられている動植物を数種も育てている。

昨年、愛知県で開催された生物多様性条約締約国会議 COP10 で、日本政府が提案して採択



図1 椎の森の整備の過程：暗いごみの森



図2 椎の森の整備の過程：演劇部の廃材



図3 椎の森の整備の過程：整備後に植えたホタルブクロ



図4 椎の森の整備の過程：明るく見通せるようになった森

された「生物多様性の10年」が始まる。気候変動やピーク・オイルに比べて、生物多様性はなかなか難しい生物学的な概念であるので、市民に広く普及してはいない。

野生生物と栽培植物・家畜、絶滅危惧から経済利用の利益分配まで幅広い内容と解決困難な課題を含んでいるので、「広報、教育、普及啓発CEPA」の重要さが求められている。学芸の森には動植物を採集し、または、放散に来る人が絶えないので、残念ながら生息情報は公開できない。

本年はとりわけ「国際森林年」でもあったので、「学芸の森」の中でも特に懸案の場所であった学生サークル棟西北の常緑樹林の再生活動を一般共通科目『学校園の基礎と展開』受講生とともに実施した。朽ちかけた木を除伐して、茂みの中にうち捨てられていた建築廃材と演劇部漠のごみを片付けて、林下に林床植物を植え、枝打ちチップを敷いた小道を造り、テニスコートが見通せるようにした(図1~4)。

環境教育研究センター彩色園の野菜や果樹は適当な収穫期を待ち、講義で使用する予定を立てていると、いつの間にか根こそぎ盗難にあう。タケノコは盗掘され、竹林の維持すら困難になってきた。研究素材の植物も盗難にあったこともある。大学は社会的な敬意を得て、信頼関係の上に教育研究活動がなされてきた。ところがこの10余年は目に余り、教育研究に障害があるほど、いろいろなものが盗難にあうようになった。盗掘現場で注意をすると、税金を払っているのに、国立大学のものは勝手に盗っても良いのだと開き直られる。

また、東日本大地震後、計画停電が実施され、節電が強く求められたので、環境教育研究センターでは世界中の農家から分譲を受けた貴重な雑穀類の種子保存が困難となり、イギリスの王立キュー植物園のミレニアム・シード・バンクに7350系統を寄贈した。

